2Ka-11　畳空間にかかわる住様式と住意識の検討
－大都市圏の注文戸建住宅における－
（第３報　居住者意識からみた畳空間の動向）

奈良女大　○伊東理恵　今井範子　中村久美

【目的】第３報では，独立住宅居住者の畳空間に対する意識を探り，畳離れの動向を明らかにすること，畳空間に何を求めているかを明らかにすることにより，今後の畳空間の方向性を精神面から探ることを目的としている。

【方法】調査対象は，第１，２報での対象世帯における18歳以上の居住者とした。有効ｻﾝﾌﾟﾙ数 963。対象の概要は男性43%，女性57%。年齢は40代を中心に各年代に分布，平均43歳。

【結果】畳に愛着のある人は6割を超えるが，30代未満では4割に満たない。希望畳室数は「少なくとも1室」55%，「2室以上」37%である。その室種は1室希望では客間が半数を超え，くつろぐ空間が続く。2室希望では約半数が1室は客間を希望。畳への愛着意識も必要性も若い年代ほど低く，特に30代未満では「畳離れ」の進行が明らかである。一方でなお畳に執着する人の存在が認められる。ごろ寝の床材として畳を好む者は半数を超えるが，高年層ほどその割合は高く，若年層では畳に執着しない傾向がみられる。畳室の良さとして「心の安らぎ」，畳の良さとして「自由な姿勢」「新畳の香り」「い草の感触」などが多くあげられた。畳空間に求めるものは，空間全体から感じる心の安らぎ，横になって休息するくつろぎや，畳独特の香りや感触など精神性にかかわることがらであり，格式を求める意識は薄らいでいる。今後の畳空間の動向については，「1室残る」約半数，「畳室のある住宅とない住宅にわかれる」2割，「次第になくなる」「一部の住宅にのみ残る」各1割であった。畳空間の計画において，デザインや素材については伝統的なものへの支持が高いが，一方で新しいものの採用が望まれており，「伝統性」の中に「現代性」を取り入れることが必要とされている。